



広報

www.jalc.or.jp

第 418 号

2009 年 1 月 1 日

日造協

新春特別号

「造園建設業の活性化に向けて」
次代を担う中堅・若手造園人が想いを語る

発行／社団法人日本造園建設業協会（Japan Landscape Contractors Association） 創刊／昭和 49 年 6 月 1 日 〒 113-0033 東京都文京区本郷 2-17-17 井門本郷ビル 2 階 TEL03（5684）0011 FAX03（5684）0012



松屋寺のソテツ

大分県速見郡日出町の松屋寺の境内にあるソテツは大正 12 年、国の天然記念物に指定されました。このソテツは、雌樹でひとつの親株から十数本の支幹が分岐しています。高さ 6.1 m、株元の周囲 6.4 m、南北幅 9.7 m、東西幅 8.5 m の巨樹で樹齢は推定 600 年以上と推定されます。このソテツの由来は、戦国大名で豊後国の覇者、大友宗麟が外国貿易の際、南方より取寄せ、愛育した由。江戸期、日出藩は豊臣秀吉の正室、おねねの血縁の木下俊治の領有となり、松屋寺は木下公の歴代の菩提寺です。これまで嘉永 4 年（1851）、大正 4 年（1915）の 2 度の火災に遭い、一部消失したり自然災害により損傷・倒壊したりしたが、いずれも見事に樹勢を回復し、堂々とした威容を見せています。（大分県支部長 栗木 修一）

2009 年

謹賀新年

（社）日本造園建設業協会

会長 佐藤 四郎

年頭にあたって



新年明けましておめでとうございます。新年を迎え、新たな希望と目標に身が引き締まる思いで御座います。

本年の干支は丑（牛）であります。

年末年始は「牛飲馬食」と、沢山の飲食で胃への労わりが必要な時期であります。胃を 4 つ持っている「牛」が羨ましく感じられる事と思います。

創世神話で牛は「子（ネズミ）の刻に天が開かれ、丑（ウシ）の刻に地が拓かれた」。つまりネズミが夜を噛み切って天をつくり、ウシが地を耕して土地を拓いた、とネズミと共に天地開闢（てんちかいはく）の英雄であります。

さて、昨年は 1 月の中国産冷凍餃子事件に始まり、数々の偽装や不祥事による食品不安が日本をつつみ、2007 年を象徴した漢字第一位の「偽」がそのまま継続された一年でありました。また経済面ではサブプライム問題が引き金となり、世界的な金融危機を招いており、ここ日本でも株価の乱高下や上場企業の倒産など深刻な経済状況となっております。

世界金融市場の規模は約 7.5 京円と言われているようですが、世界の GDP 総計は約 6 千兆円であり、金融経済が実体経済の約 10 倍以上と大きな歪みが露呈している訳です。

一方、昨年はオリンピックイヤーであり、スポーツの世界では北京五輪で水泳の北島康介選手が 2 大会連続で 2 冠を達

成し、また男子ゴルフでは若干 17 歳の石川遼選手の活躍、テニスの伊達公子選手の復帰活躍など勇氣と元氣を与えてくれました。

また、環境問題は昨年の洞爺湖サミットを経てさらなる発展を遂げており、排出権取引を始めとした環境対策が具体的な施策として動き始めた事は、我々造園産業界にとってはフォローアップのニュースであります。

私も昨年の 6 月に当協会会長 2 期目を拝命し、「VISION21」に沿った施策を進める一方、低炭素型都市を目指した都市公園・緑地保全等の事業推進要望活動、また昨年で 3 年目となった「全国造園フェスティバル」の実施、2010 年に名古屋で開催される「COP10」（生物多様性条約第 10 回締約国際会議）の支援特別委員会である「COP10 支援特別委員会」設置などを行いました。

そして、最大の課題である公益法人制度改革に伴う当協会のスタンスを今後政府が要請する条件を把握・整理し、皆様の貴重なご意見と合わせ、会員にとって最良の方向を検討したいと考えております。

経済状況が思わしくない中、「商いは牛の涎」〃〃商売は氣長に辛抱強くコツコツと続けるのがコツである〃〃を再確認し、本年も会員の皆様と元気に活動できることを祈念しております。

性化に向けて 造園人が想いを語る



東京ガーデンパレスで行われた座談会のもよう

座談会出席者

佐々木 創太
むつみ造園土木(株) 常務取締役

高橋 正之輔
アゴラ造園(株) 取締役技術営業部企画事業室長

高木 奈美
株日比谷アメニス 住宅環境部ライフサポートチーム

鳥飼 寛子
内山緑地建設(株) 関東支店 内山ガーデン・アーボリタム推進室係長

小林 久仁嘉
(株)小林造園 統括部長

久保 和則
(株)葉隠緑化建設 常務取締役

藤巻 司郎
(社)日本造園建設業協会副会長

五十嵐 誠 (司会)
(社)日本造園建設業協会副会長



高橋 正之輔 氏

司会 (五十嵐) 今回の座談会テーマは、「造園建設業の活性化に向けて」ということで、新春にあたって、元氣の出るお話をお聞きしようとの企画です。

21世紀に入って、環境の世紀、緑の世紀といわれ、多くの知識人がいると語り、洞爺湖サミットなども開かれ、我々が地球に暮らし続けるには、環境を何とかしなければならぬ、と。

中でも「みどり」を大事にしなければならぬというところが国際的にも認知されています。

こうした動向を背景にすると、私たちが造園建設業は、時代の主役産業になっていくと、洞爺湖サミットなどでもおかしはならないのです。が、実際にはそうならない状況にあります。

座談会にあたって

今まで公的セクターを中心として、造園業に心は緑化が進められてきたといえますが、この公の部分は800兆円という膨大な借り入れがあり、財政再建というものが、我々の置かれた状況だと思っています。

しかし、いつまでも財政再建だけをやっていく訳にはいかず、人々の暮らしとともにあるまちづくり、国づくりが必要で、私たち造園の技術、生物多様性など、自然に対する慈しみを持つた技術が、これまで以上に求められてくるものと思います。

産業として、社会の期待に応えられる体制を備えておくことが必要です。

そこで、本日は果敢に造園に取り組みされている中堅・若手の方々にお集まりいただき、元氣の出るお話を全国に発信していただければと企画しました。

ぜひ、忌憚のないお話を存分に伺えればと思います。

現場の進捗が思わしくなく、首都圏ではまだまだ緑の豊かなところで伸び伸び遊びながら育つたので、漠然とですが自然への親しみがありました。その後、何らかの形で人の生活環境に携わった仕事したいなと思うようになり、また、植物などに興味を持って学んでいくうちに造園という仕事を知ってこの業界に入りました。

しかし、多摩丘陵の外れ、そのままだま生活を続けていたところ、大学の林学ではなく、花の方の先生から、淡路景観園芸学校の話を聞き、景観園芸というこれまでもあまり考えられていなかった概念を知りました。

私は漠然と、これまで学んできた林学的なものと、人々の身近な暮らしというものをつなげることができないのではないかと考えて、淡路に行き、学校では、棚田における人々の暮らしなど、自然の中で、人々がどう生きてきたかといったことを学びました。

私と造園との出会い

佐々木 本社は秋田市内にあり、東北を主にいくつか営業所を展開させて頂いております。東北という地域柄なのか、人の温もり、人々の触れ合いを大事にして仕事に取組んでおります。

ここで、造園業界に飛び込んだというよりも、自然の流れとして溶け込んでいたという表現が適切なのかと思います。

建設業界全体は、大変厳しい状況にある事は事実です。談合問題、工事価格ダウンピングによる受注競争、金融問題における貸し渋りなど建設業界においては、風当たりが厳しく何となく暗いイメージが先行していますが、現代社会におけるインフラ整備、環境維持に

現場を含め、仕事を始めてからすでに十数年になりますが、その頃と比べても、仕事の量だけでなく、質についても変わってきたように思います。

民間の仕事でも、造園外構の担当主任が、建築の知識しかないまたは、若く経験が浅い為に、多くの業者・職人に対応しきれず、

きつかけは、造園業を営んでいる父親の姿を見て育ったという事と、生育環境が比較的自然に恵まれていた上に、近くにナーセリーもあり、物心ついたときには、造園の世界がまわりにありました。こうした

現場を含め、仕事を始めてからすでに十数年になりますが、その頃と比べても、仕事の量だけでなく、質についても変わってきたように思います。

民間の仕事でも、造園外構の担当主任が、建築の知識しかないまたは、若く経験が浅い為に、多くの業者・職人に対応しきれず、

現場の進捗が思わしくなく、首都圏ではまだまだ緑の豊かなところで伸び伸び遊びながら育つたので、漠然とですが自然への親しみがありました。その後、何らかの形で人の生活環境に携わった仕事したいなと思うようになり、また、植物などに興味を持って学んでいくうちに造園という仕事を知ってこの業界に入りました。

小林 京都市内からやってきました。私は、大正6年に祖父が創業した造園会社におり、本当に小さい頃から、父にお寺さんやいろんな現場に連れられたりしていました。高橋さんと同じで周囲がすでにそのように思っていたようです。自分自身も他の選択肢が思いつかず、もともと体を動かすのも好きでしたし、現在はこの仕事をして良かったと思っています。入社してから私の小さい頃を知っている社員の方から、お前は

活の業建設園造

次代を担う中堅・若手

新春座談会 日造協

「うどん屋になりたかったんじゃないのか」と冷やかされもしましたが、職人として仕事をするうちに、京都という土地柄、先輩にも恵まれ、本当にいろいろなことを教えていただきました。

しゃべるのは苦手でしたが、そうも言っていられませんが、営業などをするようになり、お客さんと打ち合わせをして、提案をし、庭をつくり、出来上がる。すると、喜んでもらえて、お金もいただけるなんて、造園というのは実に素晴らしい仕事だと、改めて思いました。

しかし、実際にはそんな簡単なことではなく、自分の思いだけではだめで、お客さんの話を聞いて、そこでどういう提案ができるかが問われます。

今もお客さんを担当させていただいていますが、慣れないうちは、なかなか立ち入った話はできませんが、懇意にさせていただくようになると、いろいろなお話ができるようになります。客観的にみて、この辺りはこうした方が、いらした方にも喜ばれるなどと、提案をさせていただき、実際に整備をすることで、これまで一般の人が拝観されていなかった場所が、有料拝観できるようになり、お褒め言葉をいただきました。

京都は観光客も年々増え、こうした提案をすることで、施主さんにも、訪れた方にも喜ばれる、いいこと

と尽くめの仕事です。こうしたことは、少し前までは、実感していませんでしたが、最近になって「造園の仕事をして本当に良かった」と思っています。

また、京都が造園の中でも特別な地域であるということや、会社を経営するという点から、社員の生活などを含め、これまで以上に考えなければならぬことも解り、さまざまな課題を抱えているところです。

久保 佐賀県からやってきましたが、私も生まれたときから今の会社があり、子どもながらに植木屋の侘だよという感覚が自然に育っていました。ただ、会社や苗圃は離れていたために、それを実際に見ながら育ったわけではありませんでした。

高校のときに、自分は何をやりたいんだと考え、都市計画やまちづくりといったものに関心を持ちました。このベースには、家が造園屋をやっているのに関係があるのではないかと人に感謝される仕事ができたらなという思いがあったのだと思います。

大学を卒業するときに、造園に関わらず、都市計画専門のコンサルタントなどに行こうかとも思いましたが、幅広く仕事をしていた造園会社に、勝手に入ってしまったという感じで、会社に入ってからほぼ、現場に出っぱなしでした。

そして、5年前に、佐賀に戻り、2年くらい現場を

中心にやりましたが、この2、3年くらい前から、現場以外の仕事に携わることで増えてきました。

ただ、これも現場の経験があつてこそできるもので、現場経験が生きています。

仕事を取り巻く環境については、他の地方でも同じような状況だと思いますが、造園業は、公共事業が縮小し、さらに民間市場規模も小さく、厳しい状況になっています。

造園業を維持していくには、民間、個人邸の庭づくりのシェアを高めていくことが、安定につながり、先ほどの話にもありました。

が、お客さんに喜んでいただけるという、やりがいのある仕事だと思っています。

そこで、現在取り組んでいるのは、個人のお客様の獲得です。地方は、戸建がほとんどですし、かつ敷地も広いので、庭がある家も多く、景気が悪いといつても、庭にお金がある程度掛けられる年齢層の高いお客さんがいらつしやる。

しかし、実際に始めてみると、こうしたお客さんの多くは、これまでどこに頼んだらいいか解らなかつたとおっしゃっていた方がほとんどで、逆にびっくりしました。

このため、去年くらいから、ショッピングセンターの中で、月に1回くらいのペースで「お庭の相談会」といったイベントを開催

し、予想以上にお客さんが増えています。ただ、会社全体から見れば、まだまだシェアは低く、これからを期待したいと思っています。

こうした中で、将来の夢というところ、社員の方が、「私は造園屋だ」と誇りを持つて働けるような環境にすることがあり、そのためには人々に喜んでもらえる仕事をしていかなければならないと思っています。

司会 若い方々のお話を一通りお聞きしましたが、大先輩として藤巻さんいかがですか。

藤巻 主役は若い人たちがなので……。

この仕事に入ってから45年、まったく別のことをしていましたが、会社を任されることになり、あわてて勉強したというのが正直なところです。

造園のことなどまったくわからなかつたので、その分人の何倍も勉強し、ここまでやってきて、現在は、これからの造園建設業はどういうふうな感じなのかなどについても考える立場となり、いろいろな方々のご意見をいただき、一昨年は日造協の「VISION21」がまとめられ、そのアクション



久保 和則 氏



ショッピングセンターでの「お庭の相談会」のようす。店内には、事例などのパネル展示も行う相談スペース（写真奥）だけでなく、ミニガーデンも設置。このほか、ショッピングセンターではアレンジメント教室なども行っている

ンプログラムもつくられました。今日集まっていたいた皆さんにも参考になる内容ですし、すでに頭に入っている人もいるかもしれませんが、日造協も真剣に将来のことを考えていることを、改めて理解してもらい、自らの会社や地域の方々に、こうした考えがさ

らに理解されるようお手伝いいただければありがたいと思っています。

しかし、日造協だけの頑張りでは、なかなか世の中は変わらない。政治経済も含めて変わっていかなくては

ならないのだと思います。しかも、時代の変化や流れは非常に早い。これからの時代を引っ張っていくには、若い人たちの力が欠かせません。厳しい状況の中にあるからこそ、将来を夢見て頑張りたいと思

う中で、広く世の中や社員のことを考えているお話は聞いて頼もしく思います。今日集まってくれた男

性と女性では、造園に入っただけでなく、ミニガーデンも設置。このほか、ショッピングセンターではアレンジメント教室なども行っている

黙ってないで提案を

司会 かつて「みどり」というと、単体の緑そのものだけを示していました。最近では、さまざまな植物の多様性など、多様な広がりを持つたものとして捉えられています。

という時代に対応するために、これまでの庭園や公園緑地といった部分だけでなく、自分たちの側から、何かプレゼンテーションしていかねばならないと思います。

保守的に仕事を待っている

たのでは、状況は改善されないし、先ほど話にもあったように、量や質ともに厳しくなる中で、黙っていて

はいい仕事はできません。こうしたところでも若い力に期待したいところですが、一方で、造園の基本であつたはずの個人のお庭づく

久保 自分の知っている

ところでは、造園施工業者ではないところが、個人に対して営業を行っており、そこが造園屋さんに仕事を発注して、ロイヤリティを貰うという形になっている

もちろん、営業に長けたところが一歩先行くというところがあると思いますが、地元

私の地域の場合、人口約24万人、9万世帯であり、

個人邸・民間市場の開拓を 笑顔が生まれる“みどり”の創造へ

市場としては、まずまずで、個人への営業は特別に難しいというものはありませんが、これまで積極的にやっていませんでした。実際の営業方法は、いろいろな方法があると思いますが、1軒1軒営業するよりも、人が集まっているところの方が、効率的であることから、土日には10万人くらいがやってくる地元の大型ショッピングセンターさんに話をもちかけるところから始めました。

そして、早く受け入れてもらい、いざ店内にガーデン相談会の会場を設けるだけでなく、かなりのインパクトで、多くのお客さんに関心を持っていただきました。その中で、30〜40組のご家族が実際に相談されました。

今のところ一番注目している取り組みはこの個人庭事業で、お客さんも喜んでくれる仕事なので、やる方の喜びにも繋がります。た



芝生の校庭は、授業での使用はもちろん、休み時間や放課後の利用も活発で、運動会などでも、ダンス、組体操など、さまざまな活用が図られており、そのほか、環境学習や地域とのコミュニティの場となるなど、砂などの飛散も抑えられ、多様な効果が期待されている

だし、造園工事は、大量生産ではないので、逆に突然仕事が増えても対応できませんから、ちよいどいいともいえます。会社の体力に合わせて進めていきたいと思っています。

そして、この大量生産でしかないというところに、それぞれの造園会社、それぞれの地域ならではの造園屋さん活躍する場所があるのではないのでしょうか。

司会 造園の営業方法として、直接顧客に来店していただく店舗型もあります。人が集まる場所で営業活動を行うということが、経費的にも効果的で、素晴らしい取り組みですね。

一方、公的な空間も利用者は市民であり、これからは、市民と造園家がどう関わっていくかが、ポイントだと思いますが、この辺について、鳥飼さんいかがですか。

鳥飼 この間まで、住宅外構にも関わっていましたが、個人のお仕事は単価的にも仕事的内容的にも細かく、しかもそうした制約の中でいいものをつくらなければならぬといった点で、予算の線引きが難しい

ものでもありますが、お客さんが喜んでくれる、完成したときの喜びは大きいものがあります。

先ほど、造園会社自体が店舗型で人を呼び寄せる方法もあるとお話がありました。君津での取り組みは、店舗型の延長にあるのかもしれない。君津では、37haある敷地の一部を一般開放しています。

お宅にお伺いして、いろいろな写真を見ながら、ご説明してもなかなか伝わりにくい部分もあります。君津などで実際に現場を見ていただくとまったく違い、実感を持ってご理解いただけます。

そもそもこの君津の庭は、アーボリータム、樹木園として、会社のショールーム的な場所としての位置づけもあります。

こうした観点からも、見本となるお庭がいくつも点在すると、実際に庭をつくりたいといわれる方々とお話もスムーズでしょうし、庭をつくらうと思っていなかった人たちも、こういう庭が欲しいという気持ちになったりするのではないのでしょうか。

一軒のお宅が素敵な庭や



鳥飼 寛子 氏

花飾りなどを行うと、ご近所にも広がります。オープンガーデンといった取り組みもこうした素敵なお庭を見た人が、うちもしてみよう、と、広がり、今では全国的に広がりをみせています。

こうした空間づくりに私たちがつと関わることができた素晴らしいと思います。

司会 地方と大都会での事情は、ちよつと異なるかもしれませんが、高橋さんいかがですか。

高橋 仕事は少なく、単価も安いといった状況で、民間についても以前から取り組んでいます。金融、不動産関係の業容も厳しく、その影響を受けているのが現状ですが、事業企画室というポジションでもあるので、日々いろいろなことを企画しなければと

考えており、このところは、保育園や幼稚園の園庭の芝生化を進められたらと、足を運んでいます。

というのも、東京都では小中学校の全校で校庭の芝生化をしようとしており、ある程度の予算措置も図られています。実際に小中学校の校庭を芝生化すると

なると、先生をはじめ、PTA、地域の方々など、多様な協力が必要で、さまざまな課題を抱える現場の先生方をはじめとする関係者の理解を得るのは難しく、校庭が狭く、利用頻度の高い校庭の芝生化はなかなか進んでいないのが現状で、

こうした小中学校に、私たちが直接働きかけるのも困難で、教育委員会の所管でもあり、学校で決断することもできません。

一方で、保育園や幼稚園は、規模や利用状況から取り組みやすく、機会を見て積極的に説明しています。

こうした園庭の芝生化は、芝生の庭で育った子どもたちが、小学校に行くようになり、小学校、そして中学校の庭も芝生がいいなと思ってもらえるきっかけにもなり、保護者の方たちにも同様の理解を得やすくなるだろうといった造園業者としての思惑もあります。

しかし、小さい頃こそ、多感であり、伸び伸びと遊ぶことが成長に重要な指摘される中で、都会の子どもたちは、集合住宅などで、ドタバタ遊ぶこともできなくなり、こうした保育園や幼稚園自体、なかなか伸び伸びと遊べるスペースを設ける余裕もなくなってきた

います。

さらに、芝生化は、環境教育といった面での効果も期待され、子どもたちの成長に大変な効果があります。

賀 春

社団法人 日本造園建設業協会

副 会 長

副会長兼専務理事
常務理事

佐藤 四郎
藤巻 司郎
樋口 敬記
五十嵐 誠
小林 脩



監 事

総支部長

北海道
東北

渡部 知
佐界

梅原 二朗
江口 浩市
北田 功

渡部 宣昭
渡部 新也
和井 史郎

山本 一隆
丸山 寿太郎
丸山 宏

福島 輝幸
早坂 有弘
初谷 雄一

西岸 芳雄
富田 祐次
高橋 一輔

須磨 佳津江
砂川 孝志
杉本 正美

杉尾 邦江
下平尾 浩一
下地 尤一

佐々木 吉和
櫻井 正昭
坂上 信明

久保 洋一
久保 和男
鬼頭 慎一

木上 正真
大坪 貞保
大塚 守康

伊藤 英昌
宇坪 啓造
大泉 紀男

赤崎 幹男
伊藤 英昌
宇坪 啓造

赤崎 幹男
伊藤 英昌
宇坪 啓造

赤崎 幹男
伊藤 英昌
宇坪 啓造

赤崎 幹男
伊藤 英昌
宇坪 啓造

赤崎 幹男
伊藤 英昌
宇坪 啓造

日造協

新春座談会

地域・地元の庭は全部自分たちで お客さんの喜び、子どもたちの

らに区などの補助金が利用できるなどといった情報を交えて、説明し、具体の事業とともに、将来への種まきに取り組んでいます。

小林 私の場合は、年々民間の割合が大きくなっていきますが、昔、庭が荒れているお宅があったので、飛び込みで訪問営業をしたことがあり、会社に戻ると、先方がどんな方かわからないし、他の造園屋さんが出入りしているかもしれない、そういった営業はやめておいた方がいいと、先輩に言われたことがありますが。

京都という特異性や一見さんお断りということはありませんが、お客さんからの紹介やホームページなどからのお問い合わせには対応しているものの積極的な営業はしてこなかったといえます。

しかし、こうした個人やお寺さんのお庭によって支えられてきた造園屋ですが、大きなお屋敷が相続税などで、数軒に分けられて販売され、その1つ1つに駐車場が作られるようになると、庭をつくらなくなってきました。

こういう状況の中で、どう動くかが求められており、たとえば、庭をつくらなくても駐車場に樹木を1、2本植えることはあり、どのような樹種にすればその環境にあっているか、その空間を安らげる景観にできるかなどを逆に提案していくようにしています。

公共事業については、日造協が実施している「街路樹剪定士」の資格者制度を活用し、「京都街路樹剪定士会」を設立し、観光都市である京都の景観をより良く保全、創出するために、路線ごとに見本剪定を考えたり、景観が良くない場所での改善案を提案するなど取り組みも進みつつあります。

京都では1年置き、2年に1回の剪定が多いです。

が、できれば毎年、それが難しければなおのこと、複数年の契約で計画的な剪定などの維持管理ができるよう求めています。

そのほか、日造協の「植栽基盤診断士」資格取得者を中心に、平成20年春には「京都植栽基盤診断士会」を発足して、サクラの枯損場所などについて、土壌調査を行い、樹勢回復などについて提案も行っています。

市民・指定管理者に対応

司会 もっとも身近な公園であり、その数も多いかつて「児童公園」として整備された「街区公園」は、時代が変化の中で、取り残されてしまったような空間になっていることが、他の都市でも多くみられますが、こうした空間をはじめ、時代にニーズに合わせた空間づくりをしていくことが、これからの造園にとって大事だと思います。

そこで、市民に直接接する指定管理者の経験から高木さんが教えてください。

高木 指定管理者の業務以外でも感じたことですが、公園は意外と利用者に優しくないのではないかな、と思います。

造園の仕事に携わっている人や行政の担当者の方々は、もともと緑が好きだったり、公園や緑地の必要性がわかっていて人が多く、

が、できれば毎年、それが難しければなおのこと、複数年の契約で計画的な剪定などの維持管理ができるよう求めています。

そのほか、日造協の「植栽基盤診断士」資格取得者を中心に、平成20年春には「京都植栽基盤診断士会」を発足して、サクラの枯損場所などについて、土壌調査を行い、樹勢回復などについて提案も行っています。

とをもちと広く知ってもらいたいというのですが、ただあればいいというのではなく、もっと使ってもらえる場所にする、こんな楽しみ方があるよ、ということを広く伝えていくことも大事な仕事のひとつではないかと、社内でも話すことがあります。

弊社も指定管理者として、公園にある木の実を使ったクラフトづくりや環境学習教室などを開催してきましたが、とても好評で、家族連れで楽しんでいたかったです。

こういう機会に公園ってこんなに楽しい、みどりってこんな風に役立つという存在自体に価値があるということ



高木 奈美 氏



公園にある木の実を使ったクラフトづくりは子どもから大人まで、家族連れで楽しめるイベントとして好評。このほか、環境学習教室など、さまざまなイベントを通じて、より公園を楽しんでもらう取り組みは、指定管理者だけでなく、緑の存在をアピールするためにも大切だ

かつてもらい体感してもらえたらいいと思います。

新しい公園をつくるのは難しい状況になっていますが、ただ緑があるだけになっっている空間も相当あると思います。そういったすてにある緑地などをもっと利用しやすい場所にするには、意味の大きいことだと思います。

今はまだ、こういった場所をつくっているのが造園屋さんなのだと認知されていなくても、利用が増え、日常となっていく中で知ってもらえることはできるので

はならないでしょうか。

私もそうでしたが、造園」という言葉はあまり馴染みがありませんでした。しかし、身近なお花やガーデニングなどといった切り口から植物に興味を持つている人がたくさんいるのは事実です。造園」は知らなくても、造園屋さんをやっていることや、その概念については、きちんと話せば理解してもらえることだと思います。

司会 日造協が取り組んでいる「全国造園フェスティバル」は、そういった一般市民の方々に「造園」を知ってもらうことも、目標の一つとして取り組んでいます。本日は、造園に携わっている企業が、平日頃から努力しなければならいことであり、会社の前を修景したりする努力などをきっかけに、多くの市民が目を留めてくれることとなるのではないかと。どうしたらもっと造園を、造園建設業を理解してもらえるかをさらに考えていきたいと思っています。

地方の事情を踏まえた取り組み・活動について

																																														
										支部長																																				
沖繩県	鹿兒島県	宮崎県	大分県	熊本県	長崎県	佐賀県	福岡県	愛媛県	高知県	香川県	徳島県	山口県	島根県	鳥取県	広島県	岡山県	和歌山県	奈良県	兵庫県	大阪府	京都府	滋賀県	福井県	三重県	愛知県	静岡県	岐阜県	石川県	富山県	新潟県	長野県	山梨県	神奈川県	東京都	千葉県	埼玉県	群馬県	栃木県	茨城県	福島県	山形県	秋田県	宮城県	岩手県	青森県	北海道
下地	間世田	橋口	栗木	木上	大塚	久保	執行	成瀬	高尾	森	森本	高畑	川島	田中	正本	内山	井内	中島	富永	木山	佐野	吉田	宇坪	久保田	赤崎	福井	小栗	岸	久郷	磯部	原	斉藤	山田	加勢	望月	渡邊	茂木	増田	廣瀬	佐久間	渡部	佐々木	青沼	米内	山谷	早坂
浩之	武裕	博美	修一	正貢	正則	和男	英利	要三			明男	満夫	昇	静雄	三郎	三郎	祥之	守	守	晋一		啓造	健児	幹男	啓介	勝郎	省三	慎治	久人	孝昭	陽一	康博	充晴	勝保	一彦	泰男	一三	繁	佐界	吉和	正光	吉榮	弘美	有弘		

木さんいかがですか。

佐々木 地方においては、新規の整備事業が、ほとんど見込めないといった状況であり、公共事業については、改修・リニューアル、指定管理者の仕事が増えてきていますし、これからは中心になってくると思います。

こうした点から、従来の施工業者としての施工管理から、技術士・公園管理運営士などが重要視される運営管理又は、技能士・街路樹剪定士などの技能が重要視されるメンテナンスが中心になってくると思います。

少子高齢化といわれていますが、地方にとっては人口が減り、人がいなくなるということが、一番の痛手であり、人がいないからモノが動かず、停滞していくという、変化を求め続けることによって成長してきた社会の中にあつては、悪い循環になっていきます。

循環型社会というのはスローで変化が少なくいいのだと思います。また、これは造園というレベルではなく、地方自治という問題になりますが、造園もこうした地方自治を考えながら進めていく必要があると思います。

受注活動に対する取り組みについてですが、「二にも二にも受注、受注」いわれど、何だか重い雰囲気になってしまような気がします。

これは、お客さんも同じ

で、何の繋がりもなく突然

「お仕事ください」というと、引いてしまうのが当たり前ではないでしょうか。当然ではありますが、事前にいい関係を築いておくことが、大切だと思っています。

私たちは、誰でも関わる事ができる「花と緑」というものを扱っている業種です。花と緑が嫌いな人はいないはず。それぞれの地域にある花と緑の遺伝子を軸に、人々が集い、話し合い、触れ合える機会を構築すること『花と緑のネットワークの構築』が、大事なではないでしょうか。

いまは、インターネットで世界が繋がり、多様な情報を手に入れることができます。しかし、多様な情報を自分の中でどう捉えているかが、より大事になってくると思います。造園は、こうした情報だけでは得られない、見て、聞いて、触って、嗅いで、味わうという五感が特に大切なのではないかと思います。

そして、この五感を共有しあえる環境であつたり、情報を発信する環境を整えることが大事であり、こうした場が、先ほど話の出た指定管理を行う公園や自ら

の会社であつたり、造園

フェスティバルの会場であつたりするわけで、仕事、業務であるかにかに関わらず、常に情報を発信し、交流していくことが、大事なのではないでしょうか。

人が集うところには情報も入ってきます。先ほど述べた活動が広がることにより、人々の心が潤い、情報が集まり、新たな取り組みが起案され、事業となり地域が活性化される。こうした信用、信頼に基づく関係を主体とした取組みが、特に地方では大切だと思っています。

今後、造園という仕事は、造園という枠にとらわれずに、様々な情報と人をつなぎ合わせていく総合プロデューサーか、ある分野に特化した専門性をつきつめていくという専門クリエイターの2極化、或いは、この2つを包括して保有する企業が担っていくと思います。

少なくともたといながらも、まだまだ大きな事業がある関東圏などのお話を聞くと、うらやましいと思うこともあります。地元にとつぷりつかつて、地道に気長にゆつくりやっています。

きたいと思っています。

司会 佐々木さんのところでは、「秋田グリーンサム倶楽部」という活動もされており、一昨年は、トヨタ自動車を押さえて社会貢献部門において、内閣総理大臣賞を受賞されていますが、その辺の活動はいかがですか。

佐々木 その昔不思議な指でいろいろなものに触れ、花と緑をいっぱいにして人々の心を和ませたという少年のように、花と緑の好きな人々が集い、暮らしの中に花を咲かせ、心を豊に日々の生活を楽しもうという、花と緑のネットワークが「秋田グリーンサム倶楽部」です。花と緑が好きな人なら誰でも自由に参加できるといふ倶楽部です。

グリーンサムガーデンという会社敷地内のオープンガーデンを中心に、押花や陶器、ポーセラーツ、つる細工などの展示会や体験教室、定期的なパン作りや料理教室などの活動に利用して頂いています。春と秋の感謝祭(収穫祭)、暮れにはその道で活躍している人を招きクリスマスならぬクリスマスパーティーを開催しています。こうした活動が可能であるのは、会員の自主的な企画や積極的な関わりがあるからなのです。

「秋田グリーンサム倶楽部」で知り合った方々からの意見は、指定管理者の業務において大変参考になりましたし、こうした声を公園に生かしていくこと

“みどり”への改善も私たちの役割 “造園”だからこそその提案を生かそう

で、さらにいい公園、地域になつていくのだと思います。

司会 私も参加させていただいたことがあります。が、素晴らしいイベントで、一般の方々が多く参加していることに驚きました。そういう社会へのアピールという面では、世界を代表するガーデンングショウであるチェルシーフラワーショウに出席し、銀賞を受賞という国際的な活動も大きな効果があると思います。次回の出展も予定されているということで、鳥飼さんいかがですか。

鳥飼 2年連続で行かせてもらった中で感じていることは、ショウ自体は5日間という短さで、ディスプレイに近いといえますが、この短い会期中に最高のものであるよう何年も掛けて準備し、エイジングなどにも細心の注意を払い、どの出展者もの凄いい力の入れようで、世界中からやってくる人々の造園や植物に対する知識、文化の高さには圧倒されます。

ですから、観光地などでみられる庭を背景に記念撮影をするような人はほとんどおらず、庭をじっくり鑑賞したり、使用している植物を一つずつ聞きながらどこで調達できるかとメモをするなど、老若男女を問わず、さつと眺めるのではなく、どう生かせるかといった学びの場になっています。

イギリスでなぜ、ガーデンングやナショナルトラスト、オープンガーデンが盛んになったのかを考えると、こうしたファッションやブームといった捉え方ではなく、生活に根ざした文化として深めようという意識があるからではないかと思っています。

自然への感性や庭も、古いものを大事に守ることも日本人がしてきたことなのに、日本には身近にあり過ぎて、気がつかなくなつており、イギリスは産業革命でほとんどの森を失つてしまふなどの苦い経験から、意識的に緑や古いものを大事にしているのではないかと思います。

また、答えは見つかつていませんが、日本を振り返るきっかけになりました。造園技術という面では、現地の施工技術者と一緒に仕事をしてみて、樹木の表裏などを考えずに植えるようとしていることなどから、日本の造園の細かな配慮にも改めて気がつきました。こういう感性こそ、私たちが先人から受け継いできたものであり、繊細な日本庭園が世界で称賛される理由の一つだと思います。

そして、逆にこうした感性が日本で失われてきていることが残念ですが、海外で評価されることによつて、日本人が再認識するきっかけになれば嬉しいですね。司会 貴重なお話です。こうした情報もなかなか、会社の枠を超えて、お聞きする機会がないと思います。佐々木 定期的な交流会というものではないですが、地方ということもあり、なかなか情報交換をする機会がなく、業界の方々とも、こうして顔をつき合わせてお話しすることが大切だと思っています。「技術の発展により、生活・仕事に

おいても、人と接することが目指していることでもあります。これまでの造園建



チェルシーの会場で、日本原産の植物の名前、生育環境、手入れの手法などを事細かに質問するマダムに受け答えする鳥飼氏。出展庭園は、日本の庭園文化や技術を生かしながら、現地の素材を巧に活用し、銀賞を受賞。「かぐや姫」のテーマで、広く日本文化のアピールにも役立てられている

技術が発展しようとも、最終判断するのは人であり、必要なのは「五感」であると思います。業界内外を問わず、これから一番大事なことは、触れ合いであり、さまざまな凶悪・不可解な事件が起きたりする中にあって、人と人のつながりが、安心を生み、人々の心を豊かにするのだと思っています。司会 幅広い人的ネットワークが仕事を助け、また、地域社会にもつながっていく、ということは、日造協のお知恵を生かすともなっています。これまでは造園建

これからの夢

司会 最後に、「環境の世紀」といわれる21世紀に、「造園」を、「造園建設業」を主役産業としていくために、皆さんはどんな夢をお持ちか伺いたい。今度は若い人からということで、高木さんからお願いします。

高木 夢という難しいのですが、今はまずしっかりと技術を身につけたいと思っています。

というのも私は同期の間と比べても、まだまだ現場での経験が少ないです。

近なミクロな面でも、多くの人が少しでも毎日を持て、楽しく過ごせるような環境づくりに貢献できる自分でありたいというのが、私の夢です。

司会 一番若い人から、非常に堅実な夢を伺いました。我々が造園技術を持つていくというものであるのか、きちんと他を示すことが欠かせず、我々がそういうことをしてきたか、造園技術を持つていくということは盛んに言ってきたけれども、内容についての説明やデータなどの蓄積は不十分であったように思います。これから、そういう情報の充実もさらに進めていかなければならないと思います。鳥飼さんはいかがですか。

鳥飼 君津を中心に活動して8年。その間、北九州に行ったり来たり、ワシントンの日本庭園のお手入れなどもさせていただきましたが、ベースは君津の山で、ここにて社外でお話しする機会も多く、これまでの経験から得たお話をさせていただいているだけに、「ほお」とか「へえ」と、感心してもらえたりすることが多く、そういう学びの場を与えてくれた会社とフィールドに感謝しています。



五重塔で有名な東寺（教王護国寺）境内にある観智院の庭「楓泉観」は、庭の骨格をそのままに、樹木の配置をがらりと変え、石敷き、地被類などの整備を全体に施した

行政とともに行う京都市街路樹剪定士会の見本剪定のようす④



家と堀までの奥の庭も、安らげ空間になっている⑤

どんな話をしているかというと、「種から育てた方が良く根付く」とか、「狭い面積の庭でも、微気象で生育の過程が全く違う」な

もっと使われる 未整備の公園に

ストックを活用 失われる緑、

どといった、実際にやられている人からすると当たり前前の話だと思えますが、知らない人は珍しがって聞いてくれます。

先ほど小林さんが駐車場のお話をされていました。私が、私たち造園からすると当たり前のことでも、それをお話しすることで、納得してもらえなくともたくさんあると思います。そういったことを久保さんのおっしゃったスーパード、日造協の造園フェスティバルなど多くの機会を通じて、広く伝えることによって、より造園の知識や技術を生かすことができるのではないかと思います。

また、会社においては、こうして私がいろいろなことを学ばせてもらい、今日のような場を与えていただくと、社員を育ててくれる、働きやすい、生きがいを持つて環境を与えてくれることも大事ななことだと思います。

これからの自分の持つてくるものをいろいろところで発信していければと思います。

小林 昭和30年から40年代は造園工事の仕事が多く、石積みや竹垣などの作業に携わる機会が多かったと思います。こうした仕事があると、技術を持つ先輩が後輩に教え、若い職人の意識や向上心に繋がり、またそれを後輩に教えることができたと思います。

しかし、仕事の量が減ったり、仕事の質が変わって

人の繊細で想像性豊かな感性は、こうした長い歴史の中で培われてきたものであり、まだ失われていないと思います。

ですから、いろいろな事情から庭らしい庭をつくることで、駐車場とちよつとしたスペースしかなかったとしても、ただ車が停められれば良いという空間より、四季を感じられる樹木があり、風情や彩を添える草花などがあつたりなど、こんな駐車場にすることもできますよと、そういう働きかけをすることでも、私たち造園人であればできるのではないかと思います。

また、一般的には日本庭園とひと括りにされますが、日本庭園はバリエーションが豊富です。広大な回遊式の庭園から、坪庭といった小規模なもの、自然をそのままに樹木や瀧口に至るまでを縮景したものや枯山水のように象徴としたもの、さらに、借景として、背後の山々などをより素晴らしく見せるための庭などもあり、景石が一つ二つ並んでいるだけでも、山や海をイメージできる日本庭園とひと括りにされま

す。特に都心部では、せつかく行政が公園緑地を積極的に整備しても、このようにして失われていく民有地の緑の方が多く、結果的に、全体の緑は減少していると聞かれています。

前に話した整備の進んでいない公園や、地域のニーズに見合っていないオープンスペースなどもあわせて見直し、良好な緑、特に今

のようなきざまな事件が起きる中で、人々の心に安らぎや潤いを与えることができる質の高い緑の空間づくりが大切になってくるのではないのでしょうか。

ことだと思っています。昔は施主さんの意向を聞き取り仕切っていたのが造園で、一目置かれる存在だったといわれています。

ですから、職員が自分が造園人だと胸を張るだけでなく、その家族、子どもたちも自慢ができるような存在になつて欲しい、それが夢といえるかもしれません。

そして、こうしたことはなかなか一人ではできません。各社、各地域の造園企業、そして日造協など、造園関係者だけでなく、広く日頃から市民と協力し、理解があつてこそ、こうした夢の実現に繋がるのではないかと思います。

高橋 今、社会全体が横ばい、あるいは右肩下がり状況の中で、造園だけをどうにかするということは、残念ながら難しいと思います。現実的には、一つ一つの仕事をしっかりとやる、たとえ経費等の面で厳しいものであつても、造園の仕事はこういうものかと思つてもらえるよう、着実な姿勢が大切なのではないでしょうか。こうした積み重ねが信頼を生み、将来に繋がっていくと思います。

実際には、建築外構など、工期の終了間際で、可能な限り経費を抑えたいというゼネコンさんなどは、見た目が同じならいいじゃないというような話もされま



小林 久仁嘉 氏

す。しかし、まったく同じかという点、決してそうではなく、積んだ石と似せて張ったものでは、エイジングも変わってくるでしょうし、土壌への影響も違い、長期的にみた耐久性などにも違いがあると思います。

ですから、こうした点について、すぐに言われたとおりにするのはなく、造園技術者としての考えをい続ける必要があると思います。

お話を進め、もうすぐ了解が得られそうです。しかし、このところの不動産業界の厳しい現状の中で、なくなってしまうかもしれません。

そして、これは造園業界に限ったお話ではありませんが、経済的にも精神的にも安心できる状態が一番重要だと思っています。

ですから、社員にそうした状態でいて欲しいですし、そうするためには社会がいいい状である必要があります。

こういうこともあり、直接不動産屋さんに、造園が担う部分である外観は、景観が重視される時代にあつて、お客さんの目に最初に触れるところでもあり、しっかりしたものをつくった方が良くと、分離発注の

り、いかなる状況にあつても、その場のぎで取り繕うのではなく、何が本当に大事なことを、きちんと造園人として伝え、こなしていくことが大事だと思つています。

久保 夢を一言で言

うと、「企業」にしたいということです。植木屋から造園建設業となり、いわゆる近代化はしてきたといえますが、まだまだ「企業」のぎようがあるといえま

す。そして、土木、建築などとともに建設業として主に従事してきたわけですが、

というには心もとない気がします。

また、「造園」に求められるニーズも間違いなく変化しています。そして、経済状況は、九州でも相当に厳しく、どの業界も不況にあえいでいます。

近年は、指定管理者をはじめ、環境教育、食育、花育など、サービス業的なニーズも増えており、これらを踏まえると、建設業では十分でなくなっているのが「造園業」であり、こうした新たな分野に対応する知

しかし、造園建設業は、幸い大きくないので、経済不況の波も小さく済んでいるのではないだろうか。

ですから、厳しいながらもさらに、こうした時代の

さらに、こうした時代の

そして、土木、建築など

とともに建設業として主に従事してきたわけですが、近年は、指定管理者をはじめ、環境教育、食育、花育

ニーズに応えていくことによって、社会の認知、信頼を得ることができ、誇れる産業、造園企業として、環境や景観、健康・福祉、レクリエーション、観光、コミュニケーションの基盤なミユニケーションの基盤なます。

藤卷 司郎 氏

ら、衣食住に関わるライフ
 コーディネーターへの転換
 が求められ、こうした部分
 に造園の生きる道があるよ
 うに思います。

いわれますが、安全・安心、
自給自足、自立型社会など
キーワードは様々あるが、
今までの歴史的背景を振り
返り学び現代のスパイスを

そしてこれらを担うこと
によって、地域とのつながり、地域の活性化にも貢献
できるのではないでしょう
か。

いわれますが、安全・安心、自給自足、自立型社会など、キーワードは様々あるが、今までの歴史的背景を振り返り学び現代のスパイスを加えた新しい造園文化の構築と歴史的文化の保存が必要であると思います。

司会 皆さんの「夢」を一通りお聞きしましたが、

また、造園文化（技術・技能など）の継承や発展は、未来進化と原点回帰が同時に行われていると思います。

藤巻さんいかがですか。

藤巻 皆さんが真摯に造園のことを考えてくれていることを、非常にうれしく思うとともに、表現の仕方

というのもドイツの観
念論哲学者であるゲオル
グ・ヘーゲルの弁証法の中

は違っても、目指すものは年代を超えて同じなのではないかという思いがまし

う「企業」に成長すること
ができるのではないかと思
います。

佐々木 久保さんのおっしゃるように、造園建設業はサービス業だと思えます。ただ、私の個人的意見として、企業というよりは家業の経営精神をもつて取り組んでいくことがこれからは必要であると感じています。その家業をいかに永らえ、発展させていけるかというところが、他とは違った経営戦略となるのではなにかと思っています。

夢としては、抽象的ですが、子どもたちが大きくなったときに、一緒に笑って過ごせる場所、環境を残していきたい。少なくとも自分の記憶にある幼少時代に育った環境と同じ境

で、『事物の螺旋的發展の法則』という思想を述べています。物事は螺旋階段を上るように進歩發展していく。横（立面）から見ると上にのぼっていく、進歩發展しているように見えるが、眞上（平面）から見るとぐるりと一周して元の場所に戻ってくる。しかし、必ず一段高い位置にのぼっている。未来進化と原点回帰。よく、歴史に学べなどと

た。

私も仕事と関係なく、70を過ぎたら、公園などゆつたりとした快適な場所ので、友人と語らいながら過ごしたいという思いがあります。そして、孫や将来に豊かな環境、安全で安心できる暮らしをもらいたいと思っています。

また、今日のお話の中では、個人や一社だけではやり切れず、協会を挙げての

になれば、地域のライフ
コーディネーターにもなれ
るのではないでしょうか。
我々は自然物を扱うこと
を得手としている訳ですか
ら、そういう感覚を持つて
地域のライフコーディネー
ターを目指す。これは、環
境の時代的发展方向にも合致
しており、大事なことだと
思います

次に幅広い人脈をつくら
う、ということ、これは

ス業的な取り組みをしよう
とた時、その存在に気がつ
いてもらわなければなら
ず、造園の周知は、会社で
も協会でも総力を挙げて取
り組まなければならない課
題だと思っています。

そして、とても大事だと
思った話は、自分の子でも
孫、未来に向けて、質の高
い環境を守り、つくってい
きたいとの決意でした。

環境を保全、創出するに

が、この辺も若い人たちは使ひこなしているので、十分な展開が期待できます。

また、造園業の地位向上、社員の待遇向上を考え、造園建設業を企業にしたいといったお話もありましたが、社会的に我々が責任を持った立場にいることを示

建設業法でなくさんの建設業があり、さらにその他多くの産業の中で、何が造るのかを明確にしないと、多くの産業、企業と競う以前に埋没してしまいます。

すためにも、企業の体制の構築は大事なことだと思います。

さらに、造園建設業がサービス業というお話もありましたが、サービス業的感覚を持つことはすぐにで

そうした客観的な観点が、
 らの技術による差別化が
 あつて、主観的な感性の話
 ができるようになるのだと
 思います。こういうところ
 まで、理解いただけるよう

きることであり、大切だとも思います。そして何よりもまず、造園技術、造園建設業を一般の方々、公共の方々に幅広く知ってもらうことです。私たちがサービ



みどり・生命を扱う者として総合的展開はかる

五十嵐 誠 氏

取り組みが求められると
いった日造協への要望も受
け取りました。

協会運営を行う一人とし
て、こうした期待に応えな
ければならないという思い
を強くするとともにこれか
らもし若い皆さんが、臆せず、
どんどん参加して欲しい。
今後の活躍に期待していま

もう造園界だけでなく広く、業界を超えて仲間をつくって交流、新しい造園が抱えようとしている課題の解決にも役立つというお話がありました。

それを進めるには、実際に触れ合うことのほかに、ITなど、最新技術の活用も必要になるでしょう。

は、我々が時代の主役産業になるんだという強い思いを持って取り組まないと、できないと思います。

ぜひともそういう気概を持って、頑張っていたきたいと思います。

今日は長時間、ありがとうございました。